



金子文子。格差を鋭く見つめ、権力とそれを支える体制への批判をし続けた女性だ。時代は戦中だったが天皇制批判も展開した。彼女が放った思想や生き様は、いまだ残る社会矛盾への挑戦状だ。2月16日からは、韓国映画『金子文子と朴烈』（2017年、映画評は54・55ページ）が日本で公開され、金子文子に再び注目が集まっている。

四谷警察署内を歩く金子文子。（提供／毎日新聞社）

## 最下層から 社会を見続けた 23年の人生

### 森まゆみ

金子文子の魅力は何か。高校生の時に文子を知って魅了され、関連著書もある森まゆみさんに聞いた。

972年」という小説を読み、23歳で自死した金子文子という反抗心と生命力にあふれた女性のことを知りました。それから彼女の自叙伝「何が私をかうさせたか」（初版は春秋社、1931年。現在岩波文庫）も探して読みました。まったくすぐで鮮烈な文体で、どうしてあの年齢で、あのような文体を生み出したのか、心引かれたのです。

私は高校生の時、瀬戸内晴美さんの『余白の春』（中央公論社、1

この文体は、金子文子の人生そのものから紡がれているのかもしれない。1903年に横浜に生

# 金子文子

Kaneko Fumiko

### 年譜

1903年▶1月25日に横浜市で誕生。出生届は出されず。

1908年▶3月8日に弟・賢俊が誕生。秋頃から病気治療のため滞っていた文子の叔母（母の妹）と、父が関係を持ち始める。

1909年～10年▶文子は学齢に達するが「無籍」なので小学校に行けず（のちに父が無籍のまま通える私立学校を見つけてくる）。父は叔母と同居を始め家に戻らなくなる。賢俊は父に引き取られる。

1911年～12年頃▶母が当時同居していた男性の郷里である山梨県北都留郡の村の小袖集落に移るが、2人は別れ、母の実家である同県諏訪村へ。母は別の男性と結婚し別離。父方の祖母が朝鮮に住む娘夫妻・岩下家の養女として文子を引き取る。体面を気にし、母方の祖父母の五女として入籍させられる。

1913年～16年▶朝鮮での生活の中で、祖母、叔母らに行動を制限され、「女中」のように扱われ虐待される。13歳の16年夏に自殺を試みるが、寸前で思いとどまる。

1917年～19年▶17年春に高等小学校を卒業。19年の3・1独立運動を目の当たりにして感動を覚える。その後、山梨の母の実家に戻される。

1920年▶17歳の春に、勉強のために10円の所持金で東京へ。上野の新聞売り店に住み込み新聞売りをしつつ、正則英語学校などに通う。

1921年▶社会主義者が集まる日比谷の通称「岩崎おでん屋」に女給として住み込む。正則英語学校は夜学に移る。そこで新山初代と知り合う。

1922年▶朴烈の「犬ころ」という詩に引きつけられ、「同志としての同棲」を提案。春から同居を始める。秋に、運動誌として2人で『太い鮮人』を創刊。

1923年▶2人は「不逞社」を設立。9月、関東大震災発生で朝鮮人・中国人の大虐殺が起きる。2人は「保護検束」される。2人と新山初代など「不逞社」社員の計16人が治安警察法違反容疑で起訴。新山初代は危篤状態で獄外に出され、死去（享年22）。

1925年▶2人は大逆罪と爆発物取締罰則違反で予審起訴される。夏から文子は自叙伝の執筆開始。10月、大審院が公判開始を決定。

1926年▶2月に大審院での審議が開始。3月23日に2人は婚姻届を提出。25日に大審院が2人に死刑判決。4月、「恩赦」により2人は無期懲役になるが、文子は恩赦状を破り捨てる。7月23日、宇都宮刑務所栃木支所で文子が縊死。

作成  
編集部